Fate/Zero

フェイト/ゼロ

14

漫画 真じろう 原作 虚淵玄（ニトロプラス）/TYPE-MOON

Kadokawa Comics A

第69話
ガラガラ…
アレは……
なぜ……
聖杯は消滅したのに何故あんなものが健在なんだ!?

まさか……
聖杯を満たしていた泥はあの孔から流れ出たものなのか!
聖杯の『器』とはあの孔を開き制御するための装置に過ぎない…?
Fate/Zero
フェイト/ゼロ
漫画 真じろう
原作 虚淵玄/TYPE-MOON
(ニトロプラス)

では破壊すべきはあの孔の方だったというのか！
第69話

Fate/Zero 14

フェイト/ゼロ

Contents

第 69 話 001

第 70 話 023

第 71 話 047

第 72 話 075

第 73 話 105

第 74 話 131

Another Epilogue 171

『この世全ての悪』

な……
何だッ……
うおおおおおぉぉ!?

ドド
……
メキ
メキ
ミシ
ドド
ドバ
ドド
ドド
ドド
ドド
ドド

ドドド
ドドド
これが聖杯を破壊した末路か
アインツベルンめ……
外様の魔術師などに期待したのが間違いじゃ
ドド
まあよい
此度の聖杯戦争——
この聖杯の破片を手に入れただけでも良しとしよう
ニイィ

ほっほっほ
泥が街へと流れ込みよる
これほどの魔力の塊が制御も効かずに為すがままともなれば
犠牲者がどれほど積み上がることやら想像もつかん
メキ
さすがの聖堂教会もこればかりは隠し立てすることは出来まい

ズズ
ズズ

何をつまらぬ
殺せ殺せと馬鹿の一つ覚えのように
退屈だ その程度が何だと？
然りだ
もとより世界は斯くの如く在り
そのような依然の事実を前にして何を嘆く？何を驚く？

愚問なり
問うまでもなし
王が認め 王が許す
王が世界の在り方の全てを背負う
王は何者か？

原初の絶対者
天上天下の唯一存在
その名は英雄王ギルガメッシュ！

即ち この我に
他ならぬ！

フン
あのようなモノを願望機などと期待して奪い合っていたとはな
此度の茶番つくづく最後まで度し難い顛末であったか
だが これはこれで悪くない
受肉したからには再びこの時代に君臨し地上を治めよという天意か……
また随分と下らぬ試練を課されたものだ
まぁ良い
業腹だが受けて立つとしよう
第69話 END

―03:11:56

世話の焼ける男だ
瓦礫の下からお前を掘り当てるのは難儀であったぞ
ギルガメッシュ……
何があった？
私は衛宮切嗣に背中から心臓を撃たれた
どう考えても即死のはずだ
！
傷がない？

心臓の鼓動がない……
私に何か治療を施したのか？ギルガメッシュ
さてどうだかな
見たところ・・・死んでいる様子だが——
お前は我と契約で繋がっていた
我があの泥で受肉した拍子にお前はお前で何らかの不条理に囚われたのかもしれん
全てのサーヴァントが消滅し残ったのは我だけだ
つまり私は お前との経路を経由した『この世全ての悪』からの魔力供給によって存命しているということか
この意味が判るか？綺礼

聖杯を勝ち取ったのは我々だ
故にその結末を刮目して見るがいい
聖杯が真に勝者の願望を汲み取るのであるならばこの景色こそが——
言峰綺礼
お前の求め欲していたモノだ
これが……私の……望み？

こんな破滅が
嘆きが……
私の愉悦だと？

……ははッ
何なんだ?
ははははッ
何なんだ私は!?
こんな歪みが?
こんな汚物が?
よりにもよって言峰璃正の胤から産まれたと?
何だソレは!?
ははははっ
有り得ん!
有り得んだろうッ!?
我が父は狗でも孕ませたというのか!?
ははは

何という邪悪
何という鬼畜
神の愛より外れた道が
これほど色鮮やかな
喜びに満ちていたとは
もはや自らの心を
抉る絶望までもが
甘く好ましい
ああ いま私は
生きている！
確固たる実存として
ここに在る！

初めて識った
初めて実感した
己と世界との
繋がりを
己の精進とは
あまりにも真逆の
場所に見出した真理
その皮肉が
痛快でならない
何と馬鹿げた
回り道だったのか
儚い夢を
見ていたことか
善なるものを貴いと
聖なるものを美しいと
それを真理と
疑わなかったばかりに
私は二〇年余りの人生を
溝に棄ててきたのだ
己の内に潜む本性が
まったく違う在り方で
世界を見てきたことに
気付きもせず

満たされたか？
綺礼よ
いいや
まだだな
これでは
足りん
確かに 問い続ける
だけだった人生に
私はようやく
答えを得た
進展としては
大きいさ
ところがな
これがまったく
何の解決にも
なっていない
問題が
解かれる過程を
道筋を省略して
ただ解答だけを
投げ渡されたのだ
これでは一体
そもそも何を
どう納得しろ
というのだ？

こんな怪異な解答を
導き出した方程式が
どこかに必ず
明快な理として
あるはずだ
それが一体
どのようなものなのか……
問わねばならん
探さねばならん
否
なくてはならない
この命を
費やして 私は
それを理解
しなければ
どこまでも
飽きさせぬ
奴……
それでいい
神すら問い殺す
貴様の求道は この
キルガメッシュが
見届けてやる

この世全ての悪——
いつかまた至らねばならない
そして次こそは見届けねばならない
その誕生を
その存在価値を!

衛宮切嗣!
よもや私を殺し損ねたと知って
この期に及んでなお
追い縋ってきたか
受けて立つとも
……
!

ん？どうしたのだ綺礼
いや益体もないモノを見ただけだ
衛宮切嗣はもはやただの抜け殻
今となっては何の意味もない存在だ
他者を救うなどと嘯きながらこんな大災害を招いた奴こそ敗残者と言える
どうせ罪滅ぼしに生存者でも探しているつもりなのだろう
まったく度し難い愚かさだ
……

—01:03:14
ズル
さ…くら…
…ちゃん…
ズル
…さくら…
ちゃ……
ギギィ…
フラ

ゴッ
ガッガッ

……おじさん……?
桜 助けに来たよ
もう大丈夫だ
この一言を告げられる日をどれだけ待ち望んできたことか
もうキミに絶望はいらない
もうキミに諦観はいらない
悪夢はここで終わりだよ

さあ
行こう桜
キミの未来を
取り戻そう
ジャリ
さあ行こう
誰にも
見つからない
場所へ
誰にも
邪魔されない
場所へ

お父さん
頭下げて
うん？
お父さんとお母さんへのプレゼント
私たちが一生懸命編んだんだよ
あらあら

ああ
ありがとう
ありがとう
父さんは幸せだ
こんな家族に囲まれてこの世の誰よりも幸せだ

だから
後悔なんてない
命を懸けた
甲斐はあった
痛みも苦しみも
報われた

欲しかったモノは
すべて手に入れた

ブツブツーブツ
ブツブツー
ワケが分からない
……

どうしてこの人はここに戻ってきたんだろう？
どうしてこんな姿になるまで生きていたんだろう？
どうしてこの人はこんな無意味な死に方をしたんだろう
きっとおじいさまに逆らったからだ
そんなことこの家の人ならみんな知っているはずなのに
……

……そっか
きっとこれは今夜の授業だ
おじいさまに逆らって余計なことを考えたりしたらどうなるか
それを教えるためにこのヒトはここで死んだんだ
はい
よく解りましたおじいさま

第70話／END

第71話
ッ……！

誰か……！
生きていたら返事をしてくれ！
お願いだ……！
返事を……！
誰か………生きていてくれ！

どう
したの？
イリヤスフィール
あのね
……
こわい
ユメを
見たの
イリヤが
サカズキに
なっちゃう
ユメを

イリヤの中にね
ものすごく大きなカタマリが七つも入ってくるの
イリヤは破裂しそうになって
とっても怖いんだけど逃げられなくて
そのうちユスティーツァさまの声が聞こえてね
頭の上に真っ黒い大きな穴が開いて……
それで世界が燃えちゃうの
キリツグがそれを眺めて泣いてるの
お母様……
キリツグはへいきかな？
ひとりぼっちでこわい思いをしてないかな

大丈夫
あの人はイリヤのために頑張るわ
私たちの祈りをきっと彼は遂げてくれる
もう二度とイリヤが怖い思いをしないで済むように
……うん
そうだよね
イリヤは知ってるよ
キリツグは負けず嫌いの頑張り屋さんだもん
だからお仕事をきちんと終わらせてもうすぐこの城に帰ってくるんだよ
ひとりぼっちは寂しいけどイリヤはちゃんと待ってるよ
キリツグが帰ってくるのをイリヤはずうっと待ってるよ

──気が付けば
焼け野原にいた
夜が明けた頃
火の勢いは
弱くなった
あれほど高かった
炎の壁は低くなって
建物はほとんどが
崩れ落ちた
見慣れた町は
一面の廃墟に
変わっていて
映画で見る
戦場跡の
ようだった

大きな火事が起きたのだろう
……その中で原形を留めているのが自分だけというのは不思議な気分だった
この周辺で生きているのは自分だけ
よほど運が良かったのかそれとも運の良い場所に家が建っていたのか
どちらかは判らないけれど
ともかく自分だけが生きていた
生きのびたからには生きなくちゃ と思った

いつまでもココにいては危ないからとあてもなく歩き出した
……きっとああはなりたくないという気持ちより
もっと強い気持ちで心がくくられていたからだろう
まわりに転がっている人たちのように黒こげになるのがイヤだった訳じゃない
それでも希望なんて持たなかった
ここまで生きていた事が不思議だったのだからこのまま助かるなんて思えなかった
まず助からない
何をしたってこの赤い世界から出られまい
幼い子供がそう理解できるほどそれは絶対的な地獄だったのだ

そうして倒れた
酸素がなかったのか
酸素を取り入れるだけの機能がすでに失われていたのか
とにかく倒れて曇り始めた空を見つめていた
ドッ
まわりには黒こげになってずいぶん縮んでしまった人たちの姿がある
暗い雲は空をおおってじき雨がふるのだと教えてくれた
……それならいい
雨がふれば火事も終わる

苦しいなあ
もうそんな言葉さえこぼせない人たちの代わりに素直な気持ちを口にした
朦朧とした意識で意味もなく手を伸ばした
助けを求めて手を伸ばしたのではない
ただ空が遠いなあと
最期にそんな事を思っただけ
そうして意識は消えかけ
持ち上げた手はパタリと地面に落ちた
……いや
落ちる
筈だった

苦しくて
苦しくて
生きている
事さえ苦しくて
いっそ
消えてしまえば
楽になれるの
だろうとさえ思った
力無く沈む
手を握る
大きな手
……その顔を
覚えている

ありがとう
目に涙を溜めて生きている人間を見つけ出せたと
心の底から喜んでいる男の姿

見つけられて良かった
一人だけでも助けられて救われた
——それがあまりにも嬉しそうだったから
まるで救われたのは俺ではなく男の方ではないかと思ったほど

男は誰かに感謝するように
死の直前にいる自分が羨ましく思えるほど

これ以上ないという笑顔をこぼした

0:00

00:0

繰り返します
本日未明 冬木市街で 火災が発生
火は市街全域に広がり 今もなお炎上中の模様です
現在 消防隊による 消火活動が……
翌朝
そう アレクセイさん 帰国されたの
うん 昨日 夜の 飛行機でね
あいつ すぐにも 帰らなきゃ ならないことを 悔やんでたよ
挨拶もせずに 帰らなきゃ ならないのを詫びて おいてくれって 言ってた
アレクセイさんは 無事にイギリスに 着いたかしら ねぇ……
明け方に ヒースローから 電話してきたよ
時差を考えろ ってんだよ まったく
あら 電話が？ 気付か なかったわ
でもまぁ あの人らしい じゃないの

LIVE
近頃 こう物騒な
ことばかりだと
むしろ良かったの
かもしれないね
……残念
だけれど
心おきなく
観光するなら
また時期を改めて
来てもらった方が
いいかもねぇ
この火災は
間違いなく
聖杯戦争が原因だ
誰が どうして
こうなったのかは
わからないけど
もしボクとライダーが
最後まで戦いの場に
留まっていられたら
制止できたかも
しれない……
でも
もうこれ以上の
悲劇はないはず
聖杯戦争は
間違いなく
終わった
……ボクなんかが
よく生き残った
よな……

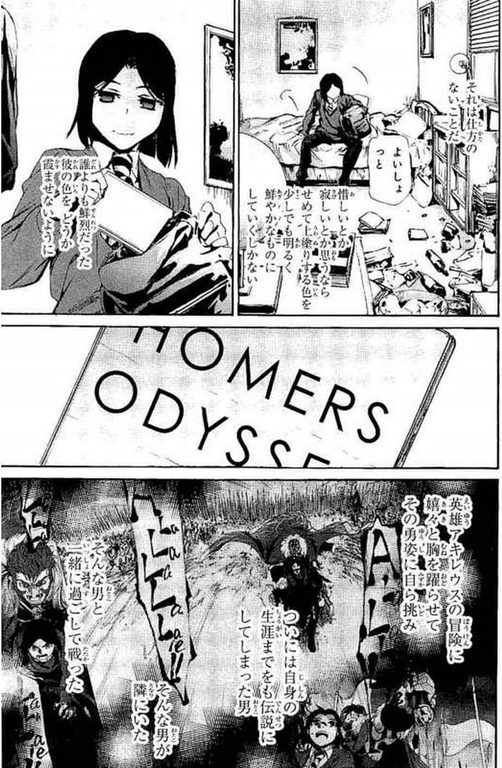
……ねぇ お爺さん お婆さん
ちょっと相談があるんだけど いいかい？
どうしたのだ？ 改まって
うん 実はね ……
しばらく休学しようと思うんだ
もちろんトロントの父さんにも相談してからだけど
学校の勉強よりも別のことに時間を使いたいなって
ほう
あらまぁ
でもまたどうして急に……
もしかして学校が嫌になったの？
いや そういうわけじゃない
ただ……今まで勉強以外のことろくに興味持たなかったのをちょっと後悔してるんだ

それでね……
うん
旅をしようかと思う
外の世界を見て回りたい
これから先のことを決める前にもっと色んなことを知っておきたい
ねぇ聞きましたかグレン？
ウェイバーちゃんったら急に まるでアレクセイさんみたいなことを言い出したわ
まぁまぁ
ともかくまあ色々と準備というか先立つものも必要になるし
まずはアルバイトでも始めようかって

……それで ここからが 本題 なんだけど
この冬木で 英語しか 喋れなくても 勤まる働き口 ってないかな？
ふぅむ
まぁこの街は 外来居留者も 多いしな
儂の同僚の つてを頼れば けっこう色々と 見つかるとは 思うが
ウェイバーちゃん それじゃあ もうしばらく 日本に？
うん
もし構わない ようなら…… 目処がつくまで 厄介になっても いいかな？
もちろん ですとも！
パチ
パチ

二日――
たったそれだけの日数なのに
この部屋はもう
アイツの存在感で
色づいている

読みかけの雑誌
食い散らかされた煎餅の袋
そこかしこに転がるワインの空き瓶
かつてこの部屋で眠り
飲み食いした
もう一人の人間の痕跡
けれどもうこの〝色〟が部屋を染めていくことは二度とない
これからボク一人の人格によって古い色は上から塗り潰されていく


それは仕方のないことだ
よいしょっと
惜しいとか寂しいとか思うならせめて上塗りする色を少しでも明るく鮮やかなものにしていくしかない
誰よりも鮮烈だった彼の色をどうか霞ませないように
HOMERS
ODYSSE
英雄アキレウスの冒険に嬉々と胸を躍らせてその勇姿に自ら挑み
ついには自身の生涯までをも伝説にしてしまった男
そんな男と一緒に過ごして戦った
そんな男が隣にいた

そして最後は一人で嬉しげに駆け抜けて逝った
羨ましかった
連れて行って欲しいとさえ思った
あっはっはっ
だがアイツはボクを置いていった
あの時にあくまで対等でいようと食い下がっていたらアイツはやっぱり気持ちよく笑ってボクを乗せていってくれただろうか
……要するに——
まだまだ全然"なってない"ってことだなボクは
けれど焦る必要はない
ボクはまだイスカンダルが旅を始めた年齢にさえなってない
アイツが胸を躍らせた冒険が今もまだきっと世界中に残っている

それを探して旅立とう
もしかしたら いつかは こんなボクでも どこかに遠い海を 見つけられるかも しれない
そういえば アイツ
ガサ
あんなに喜んで 買い物をして おきながら 結局 包み紙も解いて なかったな
TONY
BOYSTATION
!
ゾクッ
……まったく……
ボクはこんな くだらない玩具で 遊ぶ気なんて ないんだが――
ガサ
ガサ

まあ
新しいものに
興味を持とうと
決めたばかりだし
カチャ
TONY
試してみるか
ピ
しっかし
このゲーム
本当に
面白いのかぁ？
第71話／END

君が士郎くんだね？
率直に聞くけど
孤児院に預けられるのと初めて会ったおじさんに引き取られるの
第72話
君はどっちが良いかな？
う〜〜ん……

良かった
なら身支度を済ませよう
新しい家に一日でも早く慣れなくちゃいけないからね
おっと大切なことを言い忘れた
一つだけ教えなくちゃいけないことがある
はじめに言っておくとね
僕は魔法使いなんだ

かつて衛宮切嗣という人間に備わっていた目的も 信念も
あの日の炎とともに燃え尽きた
焼け野原に取り残された男はただ単に まだ心臓が動いているというだけの
ただの残骸でしかなかった
実際 あのまま士郎を見出すこともなくその場を歩み去っていたならば切嗣は本当の意味で死んでいただろう
だが彼は出会った
誰もが死に絶えた炎の中で辛くも一命を取り留めた子供と
その奇跡がかつて衛宮切嗣と呼ばれた抜け殻の新しい中身になった

それは奇妙な生活だった
妻と娘を棄てた男が とりあえずは父親の 素振りを通し——
両親を奪われた子供が とりあえずは息子の 素振りを通し——

気がつけば そんな
毎日の繰り返しが
変わらぬ日常と
なっていった

I know that my Redeemer lives.
and that in the end he will stand up on the earth.
半年後
And after my skin has been destroyed.
yet in my flesh I will see God;
I myself will see him with my own eyes
—I, and not another.
How my heart yearns within me
……Amen.

ご苦労
だった
新たな頭首の
初舞台として
まずは充分な
働きだ
お父上も
さぞや鼻が高い
ことだろう
……
そうか
体の調子は
どうだ？
最初の魔術刻印は
問題なく移植
されたとはいえ
痛みは　まだ
残っているはずだ
問題
ないわ
そろそろ
お母上を連れて
きてはどうかな？

キイ
カクーン
カクーン
ピク
お母様
ほら
お父様に
最後のお別れを
言ってあげて
あー
ええと
凛？
キョロ
キョロ
今日は誰かの
お葬式なの？

そうよ お父様が 死んだの
まぁ大変 早く時臣さんの 喪服を 出さなくちゃ
ねぇ凛 桜の着替えを 手伝ってあげて
ああどうしましょう 私も支度しなくちゃ いけないのに……
ほら あなた ネクタイが 曲がって いますよ
あと 背中にも 糸屑が
うふふ しっかり なさって ください
あなたは 凛と桜の 自慢のお父様 なんですよ…
遠坂葵が酸欠による 後遺症で脳に障害を 負うに至った経緯は もちろん凛に 話していない
凛が解っているのは 聖杯戦争に 巻き込まれた ということだけ
凛は誰とも悲しみを 分かち合うことが できないまま 家門の重みを背負い 刻印の痛みに耐えて いかねばならない
カタン
……
このような 悲運の少女の 後見人という役を 仰せつかったことは 幸運だった

――はずだが……
世にも希なる苦境を背負っておきながら涙どころか弱音ひとつ漏らさぬとはな
まったく小癪きわまりない
極上酒の瓶があっても蓋が開かないのでは甘露どころか癇癪の種だ
あの時臣の胤ともなればさぞや歪な花を咲かせてくれるものと期待していたのに
またしばらく私は日本を留守にするが
今後について何か不安はあるかね？
……ないわよ
あんたに頼ることなんて
何も
父を守れなかった私に怒りと不信を懐いているのだろうな
そんな拙い憎しみが可笑しくて仕方がない
いつか真相を知った時この少女はどんな顔をするだろうか

次に会うのは半年後だ
その時に二度目の刻印移植も執り行う
体調管理には充分に気をつけるように
今後もますます私は外地での勤めに駆り出されることが多くなる見込みだ
すまんが当面日本に腰を据えることはできそうにない
後見人として不甲斐ないとは思うが――
お忙しそうで結構ね
いいわよ あんたがいなくたって遠坂の家と母さんは私一人で面倒を見る
あんたは異端狩りなり何なりにコキ使われてくるがいいわ
……！
――凛
これより お前は名実共に遠坂の頭首となる
今日 この日のために私から門出の品を贈りたい
ゴソ…

かつて私が魔術の修行の成果を時臣師に認められた折戴いた品だ
――以後これはお前が持つといい
――これが
シュル
お父様の――

ポタッ
……お父様……

凛はあの短剣に父の想い出を託しさぞ大切に所蔵することだろう
それが他でもない父を殺めた凶器だとは知りもせず
この悪辣な皮肉で凛の純朴を踏み躙る
これこそ私の魂を歓喜させる醍醐味だ
さて
日本を離れる前に済ませておくべき用事があるな

童養護施設　ほむ

ここが今日から
君たちが
住む場所だ
ギイィ…

さあ
入りなさい

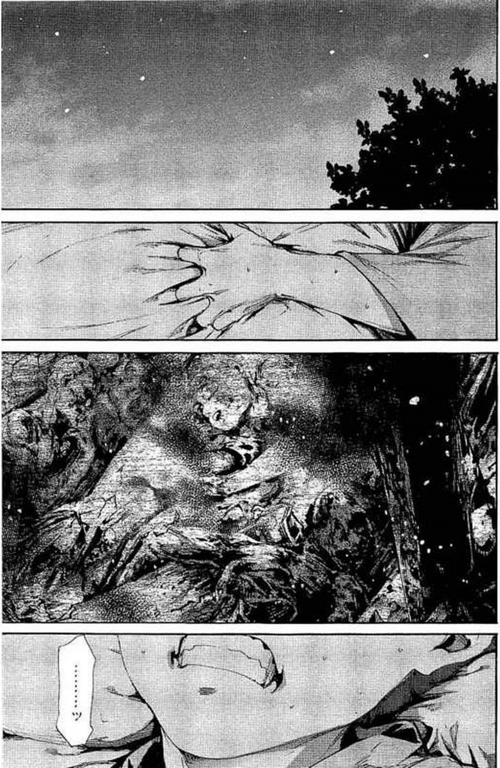
二年後
藤ねえ
ホントに
よく食うな
デブになる
心配とか
しないのか？
ふふーんだ
体脂肪率を
気にかけるほど
甘っちょろい鍛え方
してないわよー

おかわり!!!
あとデブって言うな殺人事件が起きかねない
モグモグ
私を太らせたかったらあと三杯はおかわり頂戴!
優しく『ブタさん♡』って言ってください!
ま 多目に炊いといたから良いけどさ
俺と爺さんだけなら明日の朝飯まで足りたぞコレ
ペタ
ペタ
ホカホカ
はい
士郎だってねぇ成長期になったら他人事じゃなくなるわよぉ
この食えども尽きぬ衝動的食欲
まあ全ては来年の私の劇的ナイスバディ化に向けた伏線なわけですが!
ポィッ
俺の方で脂肪になりにくい献立を考えるから
もう藤ねぇは好きなだけ食べてってくれ
士郎…それは和食の頻度が増えるってこと…かな?
爺さんも最近はすぐ腹いっぱいになるんだから
少ない量で栄養のある食事が良いだろ?

たまにはハンバーグ……
なんてのも良いものだと思わないか……？
あのなぁ爺さん
はぁ〜
こどもじた〜ん
本当にいい歳してその子供舌はどうかと思う
いったいどんなもの食って育ったらそうなるんだ
はぁ〜〜
いや……ははは……
まあまあ切嗣さんジャンクな味覚については私の方でフォローしますから
今度の盆踊りではうちの若衆がドネルケバブに挑戦するって話ですし！
そこのブタさんは爺さんを甘やかさないでくれ
む〜〜
士郎何かこの食卓の力関係は変じゃないかと姉さんは思うよ
キュッ
キュッ

ふ〜〜〜
ご馳走様
満足満足
お風呂もそろそろ沸いてるはずだ
大河ちゃん今日も入っていくかい？
是非是非甘えないはずがございません！
あーもうホント切嗣さんちってどこまでドリームハウスなのかなぁ
お風呂っ
お風呂っ
お風呂〜〜〜

木市街か大火災に見舞わ
残すため、これを記念碑とし


…………ッ

どうした士郎
眠れないのか？
うん……またあの夢を見た
そうか……
朝に飲むあの薬
今貰っても良いかな
少し早いが良いだろう

でもどうしたんだ？
いつもなら嫌がる薬なのに
でも爺さんが魔法で作ってんだろ？
それ飲んだらちょっと落ち着きそうな気がして……
そりゃイヤだよ
苦いしザラザラするし
正しくは魔術だが——
まあそうだ
ゴクン
うげ
この薬いつまで飲み続けなきゃならないんだ？
そうだな中学校に入る頃には必要なくなるだろう
それまでは辛抱してくれ
え〜〜〜〜

二年前 僕が君の治療に 使った魔術は 実際のところ 少し強力過ぎる ものだったんだ
その効き目は 今も士郎の中に 残っている
君がきちんと 抵抗力を身に 着けるまでは 薬で調整しない といけない
……なあ 爺さん こんな薬 じゃなく ってさ
直に魔法で 身を守る方法を 教えてくれよ
俺が自分の 面倒を見られる ようになったら 楽になるだろ？
ダメだ
薬を調合する 手間より 素人に魔術を 教える手間の方が よっぽど大変だ
俺だって 爺さんみたいに 何でもできる ようになりたいよ
子供の頃に 憧れる気持ちは わかる
僕だって 身に覚えが あるよ
でもね そんなものは 君には必要ない

何でだよ！
必要だよ！
だって俺 今でも あの時の 夢を見る もう二年も 経つのに 全然ダメだ
……
これから 先もずっと こんなことが 続くのは怖いよ
体は爺さんに 鍛えてもらって 喧嘩なら誰にも 負けないし
上級生だって 怖くない
でも あの夢を見たら 目が覚めても みんな 真っ白なんだ
嘘みたいに 震えが 止まらない
折角 助かったのに 何もできなく なっちまう

だから俺 また同じような ことが起こっても 今度はきっと 大丈夫だって
そう思える ようになる 自信が必要 なんだ
爺さんみたいな 魔法使いに なれたら
俺は倒れている だけじゃなくて もっと違うことが 出来るようになるん じゃないかって
士郎
魔術師にとって 一番最初の覚悟とは 死を容認することだ
それは決して 君を救ったり 支えになったり するものじゃない
でも——
さあ もう一度 横になって 眠れるかどうか 試してごらん
まだ気持ちは 落ち着かない かもしれないが 体は休息を求めて いるはずだ
明日も 学校だろ？
遅刻なんかしたら また大河ちゃんに 怒られるぞ
わかった よ……

時が経てば
記憶も薄れると
思っていたが
むしろ士郎は
ますます強く
意識するように
なっている
あんなに焦って
強くなろうと
している
この子なりに
自分のトラウマに
立ち向かう武器が
欲しいと思って
いるんだろう
よりにもよって
そんなところだけ
僕の轍を踏まなくたっていいだろうに
まったく
どうしてなんだ
こんな年から
死のイメージに
取り憑かれて
しまうなんて……

魔術を伝えるなんて論外だ
それは僕自身が身に染みて思い知らされてきたことだ
こいつは士郎が期待しているような誰かを幸福にできるような力じゃない
ザッ
だが士郎は自分の命を自分で握っているのだという実感が欲しいのだろう
確かにそれは魔術の修練においてまず最初に手応えとして感じるものだ
ハア…
死を容認するという心構えには同時にそういう側面もある
僕はどうすれば良い？
第72話／END

第73話

降参だ
また腕を上げたね大河ちゃん

ありがとうございました！
もう高校生の強さじゃないよソレ
いえ私なんかまだまだです
足りないものだらけなので日々精進しなくては
そうかい？
それだけの腕じゃ僕と打ち合っても練習にはならないだろうに
切嗣さんはボーっとしてるようで実は――
私に持ってないものを一通り隠し持ってる人だとお見受けしました
切嗣さんとの稽古は新しい発見の連続なのですよ
何から何まで学ばせてもらってます！
そこまで言われると逆に怖いな
こんな人生脱落した男は反面教師にしかならないでしょ
いやいやそんなぁ
――って言いたいところですがぁ

そうですか
切嗣さん 自分の
生活の自堕落さとか
目下の社会的地位も
自覚なさってたん
ですねぇ
ガラ
学ぶと言っても
君は僕に欠けていた
大切なものを全て
持ち合わせている
と思うけど？
ムムム
切嗣さんに
欠けてるもの
ですか？
うくん
とぉ……
『瑞々しい
青春のエキス』
とか!?
ああ
それでしたら
産地直送で お届け
するのも吝かでは
ないと私は――
ハッハッハ
まあ確かに
若々しさは
その最たるもの
だろうね
何だ 冗談
だったの？
ウッ……
すんなり
受け止められ
ました……
軽い冗談
だったのに
爺くさいのは
自覚してるよ
何しろ士郎に
爺さん扱い
だからね

私も女の子ですが藤村の人間一度口にしたことには責任を持つのです
ええ〜い よろしゅう ござんすとも！
切嗣さんに欠落してるピチピチ女子高生の実態と現状！
何から何までこの藤村大河がご教授してさしあげましょう！
さあ 何でも聞いてくださいませ！
昨今のオリコンチャートの動向から人気沸騰中の新発売リンスまで何なりと！
君は本当に面倒見が良いね

そんな風に後輩の相談に乗ってあげることも多いんじゃないか？
ええ そうですね
これも人徳が為せる業と言いますか
穂群原では事実上何でも相談室の有様でして
やっぱ相談料とか取った方が良いと思います？
人徳に値段は付けちゃいけないよ
でも……
……
そうか 君みたいに若い子だからこそ理解してやれる悩みっていうのもあるのかもしれないな
大河ちゃん着替えたらお茶でも飲んでいかないか？
もっちろ〜ん ご一緒させて頂きます！

はあ〜〜〜〜
このうららかな
午後の日差し
苦みの香る
深煎りのお茶
そして
まろやかな
水羊羹
パーフェクトです

この水羊羹
士郎の手製
なんだ
一体どこまで
台所仕事が
達者になって
いくんだろうか
大いに
結構じゃ
ありませんか
女々しい趣味だ
なんて仰る輩は
時代の流れを
読めてません
女子は
いつだって
執事系男子を
求めている
のです！
全ての女性が
料理好きと
思わないで
頂きたい！
間違いなく
クッキング
男子の時代が
来ます
士郎 きっと
婿の貰い手
には不自由
しませんよ
ま 確かに
僕は助かって
るけどね
士郎が
料理を
引き受けて
くれて
はい 特技が
あることは
良いことです
モグ
モグ
士郎はちょっと
必死過ぎるきらい
がありますけど
切嗣さんも私も
助かっています
というか何で
あんなに料理上手
なんでしょうか
私と士郎の
何が違うのか
我慢強さ？
完成図の
構成力？
ちゃんと味見
するところ？
あと「さしすせそ」
って何？

ところで大河ちゃん
さっきの続きってわけじゃないが――
ちょっとゲームか何かだと思って問答に付き合ってくれないか?
いつも君が後輩や友達にアドバイスしてあげるのと同じ要領で
おや?こりゃまた改まって
さては切嗣さん私のディベート能力をテストしようというのですか?
ええ良いですとも
どんと来いです!
うんそうだな例えばだ
君に剣道を教えて欲しいと頼んできた子がいたとする

その子は剣道が好きだとか部活動を楽しみたいだとか
そういう動機じゃなくて
ただ単に強くなりたい力が欲しいってだけだ
ふむふむ
まあ珍しいことじゃないです
うちでもそう言って入部する新入生結構いますよ
ところがだ
その子の家では手に届くところに本物の刀が置いてあって
いつでも持ち出せるくらい管理が甘い
うっかり剣道なんて教えたらその刀を使ってとても危険なことをしでかすかもしれない
どうだろう？

え〜っと
刀はちゃんとロッカーにしまって鍵かけるとか捨てちゃうとか――
という解決法はナシなのですね？
あくまで私がその子の相談事にどう応じるか
剣道部主将としてどう対処するか
というたとえ話だと？
うんそういうことだ
そうですねぇ
私が断ったら通信教育か何かで余計怪しげな方向に行っちゃいそうですし……
私だったらとりあえずは教えます剣道！
不純な動機で剣の道を志す不埒者――
とはいえ強くなりたいという願いは切実なんだろうしわかってやれないこともない
ふむ
ただし――

素振りのみ！
それこそ本当に大事な足捌きとか地稽古みたいな楽しげなのは一切ナシで！
ひたすら素振り！
雨の日も風の日も寝ても覚めても素振り百本を十回セット！
ブン
ブン
ブン
それは……剣道なのかい？

いいえ？
もちろん違いマース
だから内容もデタラメの極みを教え込みますよ
素振りは肩だけに意識を集中してお婆ちゃんの肩叩きをイメージしつつ真下にぶんぶんと
棒立ちゃん
あと竹刀の握り方を滅茶苦茶にしてやりましょう
もし真剣なんかを持ったとしてもすぐに手からすっぽ抜けるぐらい酷い具合に
ハハッ
うん なるほど
そんな無意味な練習やらされて辛いばかりで楽しくもなくて
おまけに一向に強くなれる気配もない
これならよほどの馬鹿じゃない限り音を上げますよ
「剣道なんて役に立たないじゃ〜ん」って

その結果剣に頼ってても本当の強さなんて手に入らない――
ってところまで気付いてくれたらしめたもの
『やっぱ剣より銃だぜ』とか拗らせちゃうようなら……
冬木の正義を担う立場からどうにかしてやるしかないですが
それはもうこの問答の埒外ですよねぇ
う～んそうだな……
予想外の回答ではあったがつまりは相手を騙すってことか
そもそも強さのみを求めて剣の道に進むってのが欺瞞ですから
勘違いを勘違いと気付かせるための誠実な嘘なのです
剣道はそういうもんじゃありません

大河ちゃん さらに重ねて もし仮にだが
君に教えを乞うて来た子が心底君を信頼していて君もまたその子の感情を裏切りたくはない――
という場合でもそういう手段を使うかい？
うっ……
心苦しくはありますが……
お説教だけで聞き届けてくれるほど物分かりの良い教え子って
滅多にいるもんじゃありませんし
勘違いを改心させるためにはあえて間違った道を驀進させて
辿り着く先を予見させるのが一番の近道だと思うのです
その子がデタラメ剣道を信じて精進した時間と情熱は完全に無駄になってしまうがね

良いのです
ピ〜〜ヒョロロロ〜〜
ヒョロロロ〜〜
間違いに気付くための授業料
青春は無駄なことばかりなのですから！
なるほど
でも もし その子が最後まで間違いに気付かなかったらどうする？
や それなら それで すっごいことですよ
むしろ褒めてあげられます
という と？
だって その子は意味もない役にも立たないただ辛いだけのデタラメを
本当の努力と情熱で最後までやり通したことになるのでしょう？
それは もはやデタラメじゃなくて本物です
剣道とは違うもう一つの道を究めちゃったんですからね

不屈の根性を培う奇妙な素振り精進法
その開祖としてその子は大成したことになりますよね
そこまで辿り着けるほどの人物になったなら
もう真剣で人を傷付けるなんて浅はかな真似をするはずがありません
最初にデタラメを教えた師匠が恨まれることもないでしょう
結果オーライってやつですよ

………
すごいなぁ
大河ちゃん
やっぱり
君は ただ者
じゃないよ
ゲヒヒヒヒ
やだなぁ
もう
褒められたら
際限なく
舞い上がるタイプ
なんですよ 私ぃ
調子に乗って
教員免許なんて
取る羽目に
なっちゃったら
どうしてくれ
るんですかぁ
舞い上がっている…
トン
トン
トン
ザラ
ザラ

……
士郎（しろう）

なあ
爺さん！
ホントに
魔術教えて
くれるのか!?
あぁ
根負けだ
ただし内容は
君が期待している
ようなものじゃない
きっと　がっかり
するだろうし
イヤになったら
いつでも止めて良い
僕が教えてやれる
範囲のことだけは
教えてあげよう
何度も言うが
これは　そもそも
君には必要の
ないものだ

良いんだよ！
爺さんが出来ることを俺も出来るようになりたいってだけなんだ！
……
いいか士郎
魔術を学ぶということは常識からかけ離れるということだ
魔術とは自らを滅ぼす道に他ならない
君に教えるのはそういった争いを呼ぶ類のものだ
死ぬ時は死ぬ
殺す時は殺す
僕たちの本質は生ではなく死だからだ
だから人前で使ってはいけないし
難しいものだから鍛錬を怠ってもいけない

ゴクリ
……うん
まそうは言ってもね
肝心なのはそこじゃないからいざとなったら破ったってかまわない
え？どういうこと？
一番大事なのは魔術は自分のためじゃなくて他人のためだけに使うということだよ
そうすれば士郎は魔術使いではあるけれど魔術師ではなくなるからね
……うん何だか難しいけど
わかった
俺は魔術師になりたいんじゃなくて爺さんの魔術を教わりたいだけだ
だから大丈夫言う通りにするよ

よし
じゃあ まずは基本中の基本
魔術回路の作り方から
君の身体に魔力を通すためのラインを作り出す
これは生まれつき備わっている神経などとは違う
本来は無いものだ
自分の身体の全て
内臓から指先
爪の一ミリ
髪の毛の一本に至るまでをイメージし操作する
そのための集中力を養わなきゃならない
なんか最初っから難しそうだな
そうとも
自分の身体を魔術を使える装置として作り変えるんだ

今の自分を凌駕するイメージを描いて限界を超える
士郎 これは君が君自身に勝つための戦いだ
うん
そういうことなら負けられない
頑張ってみるよ
イメージを描くための自己暗示
集中力を高めるきっかけになる言葉を考えておくといい
ボタンを押してスイッチを入れるみたいにこの一言で意識を切り替える
そういう強い言葉を
Cogito ergo
それってつまり呪文ってこと？
まあ その認識でかまわない
誰のためでもない君一人だけに効く呪文だ
自分の内側に深く働きかける印象的な言葉が良いんだが——

そうだなぁ……
えーっと
う〜ん……
何だか いまいち ピンとこないな
難しく考える必要は無い
君にとって説得力のある言葉で良いんだ
自分の身体をイメージし 仮想した意識を潜行させる
自分の分身だ
これをトレースするように隅々まで物の作りを見て回るんだ
トレース？
物を〝なぞる〟って意味だ
真似るとか複製って意味になるかな

ボタンを押すみたいに
スイッチを入れるみたいに
自分をトレースする
今すぐに決める必要はない
じっくり考えておきなさい
うんわかった
トレース……
トレース…ね……

第73話／END

第 74 話
ただ優しいままに巡り過ぎていった季節はまるで他人の夢の中にいるようだった
喪うばかりだったはずの人生なのに
あの日を境に僕の前から去っていった者は一人もいない

大河ちゃんも
士郎も
雷画老人や藤村組の若衆も
出会った日から今もずっと傍で皆笑顔を浮かべている
かつて出会いとは別れの始まりでしかなかったというのに

だが それ以前に喪ったモノは
何一つ取り戻せなかった
士郎
しばらく留守にするよ
へ？どこか旅行に行くの？
今日から世界中を冒険するんだ

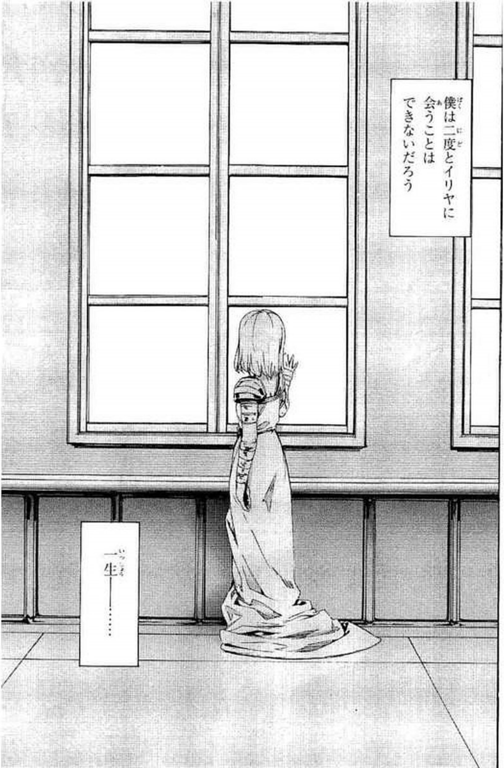
ユーブスタクハイトは森の結界を開こうとはしなかった
当然といえば当然だ
アハト翁は裏切り者の狗は無様に野垂れ死ぬまで生き恥を晒すのが相応の報いだと断じたようだ

或いは娘のイリヤを奪うことこそ僕に対する覿面の罰だと判断したのかもしれない
ドッ
グ…グ…
カハ…

そして
それは事実(じじつ)
だった

幾度訪れようと
決してイリヤの元に
辿り着くことは
出来なかった
かつての僕なら
極寒の森の結界を
突破し 城中から
イリヤを連れ出す
ことも出来ただろう
だが
『魔術師殺し』と
呼ばれたのも昔

『この世全ての悪』と
接触した僕の肉体は
死病も同然に 呪いに
蝕まれ衰弱していった
ヨロ…
手足は萎え 目は霞み
魔術回路は八割方の
機能を失って
もはや半病人も同然
今の僕には
結界の起点を
探し出すなど
望むべくもなく
ただ吹雪の中を
凍死する寸前まで
彷徨い歩くのが
関の山という
有様だった


僕は二度とイリヤに会うことはできないだろう
一生――……

そして そんな何度目かの 無理が祟ったか――
もう長くないと 感じる
五年後
近頃では もう こうして歩き回る ことすら辛く なってきた
近いうちに 僕の命は尽きる
どのみち あの黒い泥の呪いを 身に受けた時点で とうに余命は限られた ものだったのだろう

……
クラッ…
円蔵山の地下空洞に
潜んでいる
あの大聖杯には
既に手を打った

爆薬を使って
数年がかりで
地脈に手を入れ
そこに流れ込む
レイラインの一部に
瘤ができるように
細工を施した
地脈から集まるマナは
その瘤に溜まり
臨界点を超えれば
ごく局地的な大地震を
円蔵山直下に引き起こす
三、四〇年の
うちに〝瘤〟は
破裂するはず
そうすれば
地下空洞は崩落
『大聖杯』は
封印され
第五次聖杯戦争を
阻止できる……
深山の町を
散策するのも
これが最期になる
かもしれない

…四九……
五〇…！

同調(トレース)――
――開始(オン)
スー……
士郎の中にある自己犠牲と正義感はある種の歪みと言っていいほどに過剰なものだ
……
そしてどうやらそれは僕に対する的外れな羨望に端を発しているらしい
共に過ごした歳月に唯一後悔があるとしたら――それだ

士郎は僕のようになりたいと言う
僕が歩んできた道を辿りたがっている
その道程を僕の過去を
僕の生涯がもたらした災禍と喪失を知りもせず
それが どんな愚挙なのかを教え諭すことがついにできなかった
ゴロン
もし仮に士郎が僕と同じように生き同じように壊れていくとしたら
この五年間の優しい日々さえもが結果として呪いだったことになってしまうというのに

――僕の人生は、いったい何だったんだろうか――

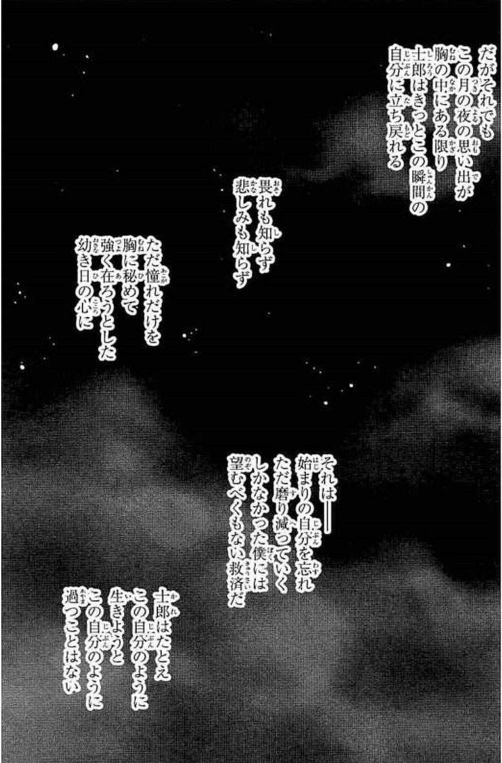
……子供の頃
——いつだったか
自分は誰かに
そう言おうとして
果たせなかったんだ
あれは一体
いつのこと
だったか……
僕は
正義の味方に
憧れてた
なんだよ
それ
ムッ
憧れてた
って
諦めたの
かよ

ザァ…
ザァ…
……うん 残念ながらね
ヒーローは期間限定でオトナになると名乗るのが難しくなるんだ
そんなコト もっと早くに気が付けば良かった
そう──
もっと早くに気付いていればあの地獄を解放することはなかった……
…………
そうだね
本当にしょうがない
……そっか それじゃしょうがないな
──ああ、本当に、いい月だ──

うん
しょうがないから俺が代わりになってやるよ
そうだ かつて誓おうとしたんだ
誰よりも大切な人に その言葉を告げようとした
爺さんはオトナだからもう無理だけど俺なら大丈夫だろ
あのとき胸に懐いた誇らしさを
決して見失うまいと思っていた輝きを
——僕は忘れていた

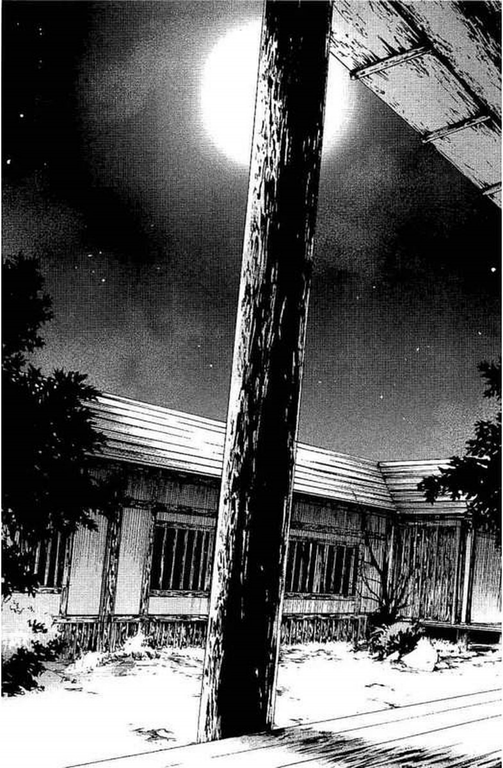
まかせろって
爺さんの夢は俺が叶えるからさ

そうか
──こんなにも綺麗な月の下なら
きっと忘れないだろう
いつか士郎は
愚かな僕の理想を嗣いで
数多の嘆きを知るだろう
数限りない絶望を
味わうだろう


だがそれでも
この月の夜の思い出が
胸の中にある限り
士郎はきっとこの瞬間の
自分に立ち戻れる
畏れも知らず
悲しみも知らず
ただ憧れだけを
胸に秘めて
強く在ろうとした
幼き日の心に
それは——
始まりの自分を忘れ
ただ磨り減っていく
しかなかった僕には
望むべくもない救済だ
士郎はたとえ
この自分のように
生きようと
この自分のように
過つことはない

ああ――……
安心した

……爺さん？
カサ
カサササ…



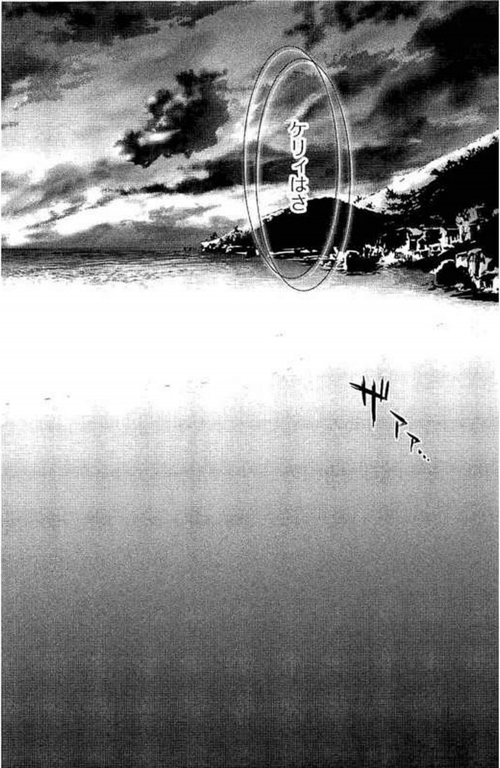
斯くして

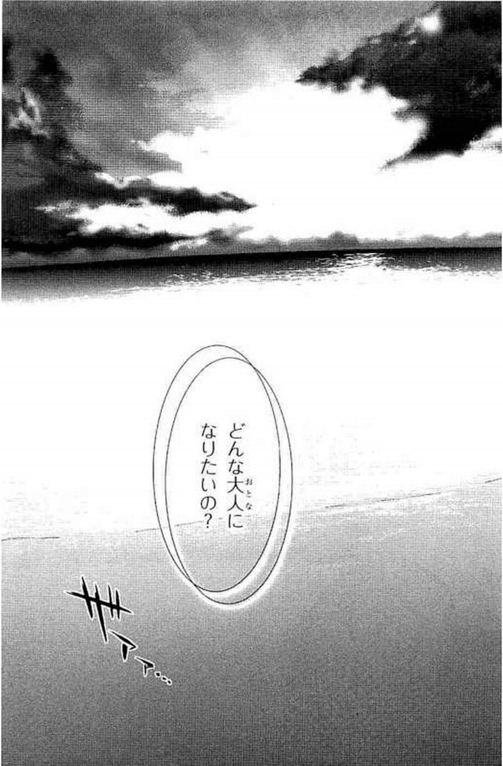
その生涯を通じて
何を成し遂げる
こともなく

何を勝ち取る
こともなかった
男は

たったひとつ最後に
手に入れた安堵だけを胸に
眠るように息を引き取った

ザァァ…
ザァァ…


ケリイはさ
ザァア…


どんな大人(おとな)になりたいの?
ザァア…

第 74 話 ／ E N D

Fate Zero

フェイト/ゼロ

In the battleground, there is no place for hope.

What lies there is just cold despair and a sin called victory,

built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

it is best to end them in the best efficiency

and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

Another Epilogue
――率直に言って私の性格は悪い
他人が苦しんでいると唇が綻んでしまうしそれが真面目な人間ならなおさらだ
光溢れる道を歩いていくはずの人間がくだらないことで鬱屈し
道を踏み外していくところなどぞくぞくと快感を覚えてしまう
ぴょんっ

Another Epilogue
◆Side of Waver◆

まあ魔術師なんてそんなもんだ
とりわけ『時計塔』の名門であるエルメロイ派はひどいもので
本家だったアーチボルトを筆頭として常に足の引っ張り合いを繰り返している
——だからその日のことはとりわけ深く覚えている
なっ…何なんだよ一体！
突然人をさらってきて！
いやいや私は君の隠れファンというやつでね
ほら解放してあげて
ズ
帰国してからの君の活躍は知っている
ジュル
！

日夜胸躍らせながら拝見させてもらっていた
だろう?
ウェイバー・ベルベット

君は――
キュッ
誰だ？
ニマ
私はライネス・エルメロイ・アーチゾルテ

第四次聖杯戦争の参加者——
ロード・エルメロイこと
ケイネス・エルメロイ・アーチボルトの義妹と言えばわかってくれるかな?
まあ血縁としては姪なんだが
その辺はよくある相続や権力争いの結果でね
じゃあボクを呼んだのは……
おっと勘違いしないでほしい
復讐とかは趣味じゃないんだ
ひら
ひら
ただ以前から不思議に思っていたことを尋ねてみたくてね
ついいささか強引な手段を取ってしまったが許してほしい
尋ねてみたいこと?

……どうして君は義兄が運営していたエルメロイ教室を買い取る気になったんだい？
先に前提を整理しておこうか
こちらに誤解があってもいけないし
ギュ
第四次聖杯戦争が終わってから君は半年ほど世界を放浪していたね？
うんうん
インドからペルシャを経由しつつマケドニアまで旅行したんだって？

途中でマフィアともやりあったんだとか
別に ただの成り行きだ
ははそれはすごい
成り行きでマフィアと戦うなんて まるでハリウッド映画のヒーローみたいじゃないか
是非そこに居合わせてみたかったもんだ
そういえばこのルート 君が召喚した英霊――
イスカンダルの征服を まるで逆順に辿ったみたいだね？
すごい偶然だ
で 問題は時計塔に戻ってからだ
なぜだか時計塔に戻った君は 三級講師の資格を取って
こともあろうに多額の借金をしてまで我が義兄が運営していたエルメロイ派の教室を買い取った

あの頃のエルメロイ派は酷いものだった
特大の火薬庫に爆弾を落としたようなものさ
何しろただでさえ身内同士の反目が酷いところで誰もが当主として信頼していた義兄を亡くしたんだ
古来 受け継がれてきた十二の名門のひとつはまさしく餓えた鳥に啄まれるように尽くを奪われてしまった
だからこそ君に教室を売り渡すことにも躊躇しなかった
小教室の価値もそれなりのものなんだがまあ他に比べればしれてるからね
ズイ
たとえ新参で亡くなった当主と争っていた君であろうと売れる相手ならこれ幸いと誘いに乗ったわけだ

ボクのことを……
エルメロイの教室を奪った泥棒と思ってるんじゃないのか？
いやいやまさか！
ちゃんと金を出して買ってくれたんだから不服があるわけないさ
それになかなか評判のいい授業をしてるそうじゃないか
権力争いで負けたベテラン講師も採用して
時計塔でも類を見ない多角的な講義を実現してるとか聞いてるぞ
……そんな……
大したものじゃないですよ……
本当にそんな良いものじゃないんだ
偶然マフィアとやりあった時だってボクなんかの魔術じゃ役に立たなくて
ほとんどハッタリと迷惑してた市民の助けでなんとかなったようなもんだし

教室の運営だってそうだ
新米教師のボクなんかのところに来るのは他のところじゃまともに相手してもらえなかった家柄の低い新世代ばかりだから
初歩的な授業しかできないボクと釣り合ってるだけだ
それだってボクだけじゃ回らないから
引退した講師に頭を下げてギリギリ誤魔化してるだけなんだよ
……ふむ
まあ 外側から見える結果と内側から見える実情は違うかもね
でも 実情がどうあれ
君はそうして元エルメロイの教室を三年間存続させた

これはもはや奇蹟といってもいい
つけこむ隙を少しでもつくればあっという間に貪り喰われる
なにしろ時計塔なんてのは半分が研究のために倫理なんか売り渡したバケモノ
もう半分が欲と権力だけを固めてできあがったバケモノの巣窟だ
教室の価値が比較的低かったとはいえ
そんな隙をつくらずに三年も存続させるとはね
重鎮どもは妖精にでも騙された気分だったろうさ
くるん
ねえウェイバー・ベルベット
ただ私個人としては最初の疑問に帰ってくるんだよ
そこまでして教室を運営してるのは一体全体どんな心境の変化かな？
……

ひょっとしてうちの義兄に贖罪の気持ちでもあった？
……ロード・エルメロイの件は……
ボクにも責任がある

へえ
どうして？
一体どんな責任かな？
あなたの義兄であるロード・エルメロイを――
ギュッ
ボクの師でもあるケイネス先生を死に追いやったのはボクの愚かな暴走によるものだからだ
ケイネス先生とはけして穏やかな仲ではなかったけれど
ボクが あの教室によって育てられたのは事実だ
だったら かつてのボクと同じような生徒たちから学ぶ機会を奪うわけにいかない

ははは っ！
ガタッ
はははははははははは！
ははははは！
ガタッ
あはははははは！
……
いやいや失礼
ククッ
ポーポー イタイ…
まさかそんな生真面目な理由だったとは思わなくてね
あーうんうん
君が貴重な聖遺物を盗み出したりしなければ
我が義兄と婚約者ももう少し長生きできたかもねぇ

くっ…
いやぁ 残念なことしたなぁ 天下のロード・エルメロイを失うとは魔術協会の大損失だなぁ
しらじら～ん
大嘘だけどね というかあのお調子者の義兄ならどうやっても死ぬさ
何故だ妹よ!!
義兄は極めて優れた魔術師だったが決して戦闘の専門家じゃなかった
対魔術師に特化した殺し屋や稀代の英霊やら相手に勝ち抜いてこられるタマじゃないさ
ボクの罪は認める
……だから命だけは勘弁してほしい
おや そこは気がすまないなら殺してくれてもいいとか言うところじゃないかな？
確か君が儀式を行ってきた極東はハラキリとか得意な土地柄なんだろう？
ここで命乞いはちょっとばかり情けなくないかい？

やるべきことがあるからだ
ふむ
……では せっかくだし 君の罪悪感につけこんで 私からいくつか要求してみようか
今 エルメロイ派の借金は大変なことになっていてね
私が次代当主に選ばれた段階で アーチゾルテ家が負担することになったんだが
これがちょっと利息を払うのも難しい
責任を取るというなら まずはこの借金からどうにかしてほしい
ニヤア
いやー ハリウッドの超大作とかつくれちゃう額なんだけどね！

ビッ
……分かった
可能な限り対処する
マジで?!
じゃ……
フルフル
じゃあふたつめ
協会で義兄の魔術刻印——
エルメロイの源流刻印を回収したんだけどね
残念ながら回収できたのは一割程度だった
お抱えの調律師では修復までに最低三世代以上はかかってしまう
これも君の責任でなんとかできないかな
……受けよう

ゴクッ
大丈夫か？
ひょっとして君
聖杯戦争とやらで脳味噌に蛆か蟲でも植え込まれてないか？
なんなら検査のための施設を紹介してあげてもいいぞ？
I am Japanese!
植え込まれてないよっ！
……
ギッ
では一番大事なところにいこう
もちろん君主の説明をいちいちする必要はないね？

君主……
ゴクッ。
魔術協会を支配する
十二人の王
ケイネス先生がロード・エルメロイの名をほしいままにしたのも
幼い頃からその座を確実視されていたから……
さんざん身内争いを繰り返した後残ったエルメロイ派は君主の地位だけは守り抜こうと懸命でね
まあ君主を輩出する資格を失ったらいよいよ一派として維持できなくなるから当然だろうさ
というわけでひとまず妥協案として持ち上げられたのが私なんだが
さすがに若すぎるだろう？
どうか私が適齢期になるまでエルメロイの君主の席を維持してもらえないかな

……それは……
かまわないけど……
具体的にはどうすれば？
私が成人するまで誰かに君主の仕事をしてもらう
という事だよ

トッ
そういう事だ
他の君主どもとの折衝は心底つまらないと思うが頼んだぞ
新たなロード・エルメロイ
待ってくれ…! それはつまり――
それともこう呼ぼうか?
ニパ
親愛なるお兄様
と

ボクが……
……君主に？
ケイネス先生が就いていた……
時計塔に十二人しかいない君主に？
……
ロード・エルメロイには『II世』をつけてほしい

ボクには重い名だ
ふさわしいのは先生だけだろう
君はてっきり義兄のことを嫌ってると思ってたが
さっきも言ったよ
けして穏やかな仲じゃなかったし個人としては今でも好かない
でも魔術師としては尊敬している
何より
ボクには追うべき相手がいるんだ

そうだ
聖杯戦争が終わっても
馬鹿馬鹿しいぐらいに
人生は続く
続くんだから
足掻かなきゃ
いけない
戦わなきゃ
いけない

いつか
お前の見たかった
最果ての海に
辿り着くまで――
Another Epilogue ／ END
そうだ
ついでに私の家庭教師になること
は？
うん
兄殺しの兄に指導を受けるのは倒錯していて実にいい
お前ちょっとおかしいだろ！

Fate/Zero

フェイト/ゼロ

【漫画】

真じろう

【原作】

虚淵玄（ニトロプラス）

TYPE-MOON

【スタッフ】

錦山まる

春乃えり

綾野貴弘

夏目りく

山高守人

【Another Epilogue脚本】

三田誠

Fate/Zero
フェイト/ゼロ

完結によせて

虚淵玄

小説というものは畢竟するところ文字の羅列でしかなく、それが誰かに読まれ、解釈され、語り継がれていくことで存在意義を獲得していく。アニメ化やコミカライズといったメディア展開は、まさに再解釈と再構築によって作品に新たな生命力を与えてくれる。漫画版「Fate/Zero」もまた、6年という長きに渡り積み重ねられた連載で、拙作に新たなる生命の息吹きを与えてくれた。その感謝の思いはとても言葉には尽くせない。

思えばかつて「Fate/Zero」とは、個人としての熱狂と衝動のままに書き綴った作品であった。あくまで本編「Fate/stay night」の添え物という位置づけに甘んじるべし、という覚悟を固めていた拙作が、以後のFateワールドの拡大と変革の果てに、むしろ独自の地位を得て評価され続けることになろうとは、想像だにし得なかった幸福であり名誉である。まさか一〇年後、カルデアを元気に駆け回るディルムッドの姿を見ることになろうとは！

粘り強い交渉と忍耐で時節を待ち続けてくれた文庫化、素晴らしい品質で実現したアニメ化、そして圧倒的な密度により内容を再演してくれたこのコミカライズ。すべて「Fate/Zero」の現在を築くにあたって欠くことのできない柱であった。そしてFateの世界は今も続々と新たな展開を重ね、もはや一大ジャンルの様相を呈しながら、さらなる領域へと進み続けている。その雄大な潮流の中に身を置けた幸運を、同時代を生きた創作者の一人として、改めて感謝したい。

ありがとう、真じろうさん。俺もエルドラドのバーサーカー引けるよう頑張るよ！

奈須きのこ

正義の味方になりたかった男の物語は、こうして幕をおろした。
救われたものはない。得られたであろうものもこぼれ落ちた。ただ遠い日に負った責務を、マイナスを、かろうじて0（ゼロ）に戻す事だけが、男に許された贖罪だった。
……だが、それは無（ゼロ）ではなく。その男の拙い願いは、後に続くものを、確かに先に送り出したのだ。

◆

最初から最後まで容赦のない、ただひたすらに圧巻されるばかりの極限のコミカライズだった。
『Fate/Zero』は重い物語だ。出力難易度の高い物語、と言い変えても良い。『Fate/stay night』の前日譚ではあるが、そこで語られるものは方向性の違う娯楽で、伝奇活劇であった『stay night』と違い、『Zero』はハードボイルド伝奇にジャンル分けされるものだ。言ってしまえば、これは原作著者である虚淵玄の、混じりけの無い伝奇作品である。『Fate/Grand Order』のように私が最終的な舵取りを任されているものであれば奈須きのこの感覚で手を入れるが、『Zero』や『事件簿』といった"一人の作家に世界を預ける"ものにおいては、私はその作家の個性、感覚を優先する。そうでなければ世界を作品を預けた意味がないからだ。『Fate/Zero』は奈須きのこからは生まれない、虚淵玄からしか生まれない物語となった。もともと娯楽作品というのはバトンリレーのようなもの。受け取った物語をそれぞれの価値観で読み解き、自らの血肉に変えて世に放つ。それは作家と読者という関係でも、作家と作家という関係でも変わらない。『作品』を生命だと仮定した時、作品はこのように子をなし、後に続いていくのだから。

幸運な事に、『stay night』は『Zero』という走者にバトンを渡せた。そして『Zero』はより多くの走者……読者にバトンを渡した事だろう。その中でもっとも大きなものが、漫画版『Fate/Zero』だと私は思う。虚淵玄の重厚な物語に真っ向から取り組み、最後まで一歩も引かずに飲み込み、小説から漫画という別の娯楽作品に昇華した事は、並大抵の技量、体力、精神力では務まらないと知っているからだ。

既にアニメ化されているとはいえ、『Fate/Zero』の原作は小説である。その一行一行を真摯に読み取り、原文のテキストにある状況を、空気を、アクションを、これに負けじと描写し続けたコミックス。狂気すら感じるディティールへの拘り。紙面から滲み出すようなキャラクターたちの感情。00:00:00に向けて一コマも気を緩めず、雪崩れ込んでいく決死行。（……あ、いや、途中でたまに、とても不思議な温かさに満ちた短編が顔を出していたけどあれはノーカン、ノーカンです！）

著者・真じろうの熱意がどれほどのものだったのか、すべてを見届けた貴方には語るまでもない。本当に、ただただ圧巻されるばかりの六年間だった。一読者として、一伝奇ファンとして、この上ない時間を過ごさせてもらった事に感謝と敬意を。

そして、この重苦しくも未来に満ちた物語の終わり。このコミックスの最後の余白に、あのピクチャーを刻んでくれた事に、『stay night』の原作者として言葉を送らせていただきます。

———ありがとう、真じろう。新しいバトンは、また、こうして確かに。

to be next generation

誰かを救うというのはね
なんで？世界なんてとっくにわたしの物じゃない
お手伝いしていいですよね 先輩？
喜べ少年
君の願いはようやく叶う
他の誰かを救わないってことなんだよ
早く呼び出さないと死んじゃうよお兄さん

story of SABER
Fate
――ほら
あの女を倒すには
絶好の機会だと
思わない？
シロウ　手を――
私ほど人間を愛している
モノはいない
故に　私ほど聖杯に
相応しい人間もいまい

時間を稼ぐのはいいが――
別にアレを倒してしまっても
かまわんのだろう？
――では果たし
合おうぞセイバー
侮るな
あの程度の呪い
飲み干せなくて何が英雄か

理想を抱いて溺死しろ
これでセイバーは
私のモノになった
de Works

──バーサーカーは強いね
誰かに負けるのはいい
けど 自分には負けられない──!
か、考え無しに思ったこと
口にしてると どこかしらで
誤解を招くんだからっ
オレが手を貸して
やると言ったんだ
story of RIN
Unlimited Bla

――さて
そろそろ頃合かの
死以上の死を桜に
与えられますか？
わたしはお姉ちゃんだもん
なら 弟を守らなくっちゃ
story of SAKURA
Heaven's Feel

貴方はサクラの
味方ですか　士郎
この先にたとえ何が
あったとしても
その時　お前はどちらを守るのだ？
良かった
先輩になら　いいです
食うか？
——ついて来れるか

問おう

貴方が私のマスターか

Fate
stay night
フェイト/ステイナイト

You will come across "Fate" from now on.